

〈目的〉高齢者においては、脳卒中、脳梗塞の後遺症により摂食、咀嚼および嚥下に伴う困難がしばしば見られる。本研究では、末期ケアの比率が高い特別養護老人ホームに、高齢者特有の疾患と食べる機能障害との関連性を明らかにし、食物形態の適否について検討した。さらに調理法の工夫で摂食行動を改善することを試みた。

〈方法〉(1)調査期間：昭和63年4月～9月までの6ヶ月間実施した。(2)対象者：東京都下A特別養護老人ホーム入居者、男8名、女25名、平均年齢81歳、男77歳(SD±8.6歳)、女83歳(SD±6.6歳)である。疾患後遺症などの障害類型を長谷川スケールにより3群に分類した。(3)調査方法：食事の摂取量は各対象者について配膳量と残食量の差から調べた。さらに、一週間ごとに対象者の食事への適応などの実態を観察し、問題点の改善を行った。

〈結果〉(1)各群とも食後の残さ込みに対する食物形態上からの検討では、水分の多い食品または少なすぎる食品に問題がある。全ての食品を粥状またはゼリー状の形態にすることにより摂取に効果が見られた。(2)咀嚼能力に低下を来している対象者は、硬いもの、または形状によつては噛み切れない点が問題であった。これに對して圧力鍋の利用により、形態を通常に保ち、かつ繊維を軟らかくすることができた。また入芝居たり、長さすぎるものに対してはカットすることにより効果が見られた。(3)摂食、嚥下障害にも個人差が大きく、これまでの画一的な食事では多くの問題があり、各群ごとにより細かく食物形態と摂食量との関連を分析することが必要である。